



TITLE:

臺灣の温泉

AUTHOR(S):

[藤]田, 元春

CITATION:

[藤]田, 元春. 臺灣の温泉. 地球 1924, 2(1): 142-151

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182707>

RIGHT:

臺灣の温泉

藤田 元春

臺灣の温泉は、其地に風土病が猖獗であるとか、もしくは其所在地が生蕃界にあるといふやうな事情のために、従前は全く顧みられなかつたものである、従つて清朝に出来た府誌の類などを見て、一向に記事がない。蓋し本島は古來の習慣として、官廳は殆ど道路に關與することなく、富豪等の特志經營に委すべきもので、若し假に官廳の補助を爲すとも、維持の方法がなかつたといふ風で、領臺當初の運輸交通の困難は、誠に名狀す可からざるものがあつた。こゝにいふ土地で、氣候必しも人體に適せず、風土病は流行する、山地には生蕃が横行すると云ふのであるから、温泉などを顧みる餘裕も何もあつたものでなく、且つ大和民族とは、入浴に對する心理狀態が違ふ南方支那人の移住地であつたから、領臺以前に温泉が開けなかつたは敢て怪むに足りないことであつた。そこへ日本人が移住して、さて温泉の一つも欲しいと思つたにしても、最初は前述せるが如き交通狀態であつたから何等其の計劃を立てるに遑がなかつたのであるが、何にしても第一條件として、明治二十八年に工兵隊が、先づ南北の縦貫軍道をつくつたのであつた、この軍道の開通によつて、土匪

の掃蕩が出来、ついで蕃地の整備も其緒につき、爾來官民の努力によつて、今日では二間幅以上の道路が、延長三千餘里に達し、官設鐵道は三十二年以後工事にかゝつて、明治四十一年には延長二百四十六哩の縱貫鐵道となり、今や私設を合せて四百六十八哩十分に達し、臺灣西部の平野は勿論東岸の斷層に沿へる平野にも縱貫線がつき、最近には日月潭に、十四萬キロの一大發電所をつくる工事中で、蕃地の奥に至る迄、文明の光がさしこみ、領臺以來三十年臺灣は全く其面目を一新するに至つた。従つて農業、糖業、林業、鑛産業等の發達大に見るべきものがあると同時に、内地人の移住するものに多く、明治三十八年第一回の臨時戸口調査の際に、人口數三、一二三、三〇二人の中、内地人は僅に五九、六一八人に過ぎなかつたのに、大正十一年には、人口三、八二一、五二八人の中内地人は一七七、九五三人で約三倍半の増加を示めし、臺北市の如き十八萬人の大都會となつて、内地人が五萬人を算し、人口三萬六千の臺中市には一萬近くの内地人が居住し、人口八萬一千の臺南市には一萬四千、人口三萬八千の高雄市には、一萬の内地人といつた風に、内地人の増加も著しくなつた、これと同時に教育の普及、衛生の進歩、醫療機關の發達、惡疫の防止等あらゆる方面が進歩改良せられて、曩日の不健康地は一變して健康地となつた。こういう事情を背景として、嘗ては顧みられなかつた溫泉も、世に出てくることになり、臺北を後にひかへて、北投、草山、臺南、嘉義を後にひかへて關子嶺といふやうに、從來の地誌にも何とも出てゐないで、近來特に臺灣

名勝として宣傳せらるゝものを生ずる事になつた、其の旅館設備のある所謂溫泉場と目すべきは、目下左の通りである。

北投溫泉（臺北州七星郡）臺北から北へ淡水線の汽車又は自動車にのつて纔に三十分翠山四周を繞る所、靈泉沸々、浴場の設備至らざるはなく遊覽地としては島内其右に出づるものがない。

草山溫泉（同上）士林驛から二里二十町、北投驛から約二里で、交通の便乃至設備の程度からいへば、到底北投の足許によりつけないが、それ丈け野趣に富んでゐて寧ろ愛すべきものがある、この溫泉と北投溫泉とは、後部詳述する通り姉妹泉で、其間は恰も内地の箱根に比すべき、大屯火山地である。されば近來此地を中心に一大遊園を作くらうこの計劃もあるから、自然と人工と相俟つて一層美はしい遊覽名勝の區となるは、あまり遠いことではない。

礁溪溫泉（臺北州宜蘭郡）今は基隆から東へ廻る鐵道が計劃されて宜蘭線に聯絡せんとしてゐるがこの溫泉は其の沿線の大里驛から十四哩半停車場所在地である、行くのに一寸不便であるが公共浴場が丘巒の上に設けてあつて、前面萬頃の田圃を隔て、太平洋を見下し、風景眞に雄大である、泉質は單純泉である。

烏來溫泉（臺北州文山郡）臺北市から南七里を隔てた蕃界にある溫泉である、其途中市から三里南に行つたところに、後には淡水河に合すべき新店溪の深潭がある、崔嵬たる絶壁を突き破つて、

巉巖水勢の削る所となり、底ひも知れぬ深淵を湛へてゐる、實に瀑布後退の跡であるが、小舟を載ふて半日の清遊を縦にすれば、千仞の斷崖に千古の老幹が翠を滴らし、紺碧の清潭に潜む水魔の吾を窺ふかに戦くといふべき景勝であるが、その形勝を過ぎ新店庄までは、汽車の便がある、新店庄から約四里の間、蕃界を横ぎり、新店溪にかゝつてゐる、鐵線橋をふみならして行くのも一興である、深山碧水、眞に幽邃の仙境である、もし蕃情を視察せんとならば、この行尤も適當であつて、臺北から尤も容易に達せらるゝ所である、決して危険はない、されば蕃情視察の人はまづ、こゝを尋ねて其氣分を味ひ、轉じて新竹郡桃園街に至り、そこより九里十七町輕便鐵道の便をかつて角板山を訪ねるのが例である、こゝは實に高山蕃界の縮圖で一度び山上の人とならんか、地は一千四百餘尺の臺地をなし、幽邃の境、枕頭山插天山等の高峯前後に聳え、大崙崙溪の源流は、數百仞の眼下に糸の如く、流れ、其間を幾群となく蕃人の去來する状を見れば、眞に太古の世を想像せしめねばやまない。遠來の珍客を遇するため、特に貴賓館薰風館などの設備も出來てゐる、不安の有無は問題にあらず、探勝入浴の士は是非一度行くべきであらう。

關仔嶺溫泉(臺南州新營郡) 縱貫鐵道にのつて、嘉義と臺南との間に後壁驛といふのがある、この驛から此溫泉へ四里半、自動車及び輕鐵の便がある、こゝは地の幽邃と設備の完整とに於て北部臺灣の北投と略々併稱するに足る勝境である。滾水溪といふ一小支流の左岸に位し、泉質は硫黃泉な

るが、此溫泉地の特色ともいふべきは、附近に燃燒瓦斯の發散地が多く、到る所に表土の赭色に變じて燃燒の跡をこめてゐることで、溫泉浴槽中にも石油瓦斯の小氣泡沸騰し、浴室の傍には竹管を地中に挿入して、瓦斯を導き夜間の點燈に供したこともあつたといふ。實にこの溫泉より關仔嶺部落に通ずる坂路の傍に噴出する瓦斯は尤も大で約二坪許の區域を占め、さかんに燃てゐるが、滾水溪下流一町餘の間に溪中十數ヶ所の氣泡噴出地がある、山の名を枕頭山（玉案山）といふが、その南西麓の六重溪に火山の勝地がある。（溫泉は同山の北麓）やはり燃燒瓦斯の地で山腹南西に火山巖碧雲寺と名づくる宏大莊嚴なる一廟がある、この廟から東微南直徑六町麒麟尾に行く山徑の少しく南方に炎上するものは、大なる珊瑚石灰岩塊の前面、數多の孔隙及び其下底より熾に噴出し、火焰は岩面を蔽ふて高き六尺に上る、しかも岩の下からは冷水が流れて居つて、瀧の不動の尊體のみ隠れ給ひしかと疑はるゝ奇景である、土民來りてこの火を拜し、火前は常に供物を絶たず、猶此外にも二三の瓦斯噴出地があつて、これによつて石灰岩の野燒をするといふ風である。溫泉には縁が遠いとするも、亦以て遊客を惹くに足る所で、應正十年藍鼎元の東征集に「流泉滾々、亂石間火出水中、無烟而有焰、（中略）信宇宙之奇觀也」と記し、乾隆六年の府誌に「玉案山後山之麓有小山、其下水石相錯、石隙泉湧、火出水中、有燄無烟、焰發高三四尺、晝夜不絕、といひ、又此處水熱、或謂即溫泉、蓋磺氣鬱蒸、水石相激而火生焉などゝ、支那流の成因論がのべてあつて、古來土着蕃人間に一

種の迷信を生じ、もし夜間火の中に往來する大鳥を見たらは蕃人即ち死すといふことになつてゐる。

知本温泉（臺東支廳卑南區）知本溪右岸の山腹に在つて、風景甚だ佳、水色透明にして、古來蕃人は之を神水と呼び浴したところ、目下旅宿浴場の設備は整つたが、交通の不便であるのが遺憾である、臺東から南方四里。

蚶子崙温泉（大武支廳大麻里區）前者の猶南で蚶子崙溪右岸の溪畔に湧出してゐる、風景の稱するに足るものがあるが、何分機關も設備も整はないので感心ができぬ、こゝは臺東から南九里に當る。

瑞穗温泉（花蓮港廳瑞穗區）知本、蚶子崙、などと共に臺東山脈の西に沿ふた斷層線によつて生じた一の温泉線上に位してゐる、こゝは臺東街から、花蓮港に至る東部縱貫線が通じ臺東の鹿野村をはじめ、吉野、豐田、林田など、呼ぶ内地移民村落が開けてゐる所である、花蓮港は内地人三千四百三十七人、本島人三千百十四人、外人三百六十一人で、本島人よりも内地人の多い點に於て島内唯一の都邑である丈けに、萬事に活氣があると稱せられてゐる、その花蓮港を背景として、この地迄鐵路四十一哩を南下して、瑞穗驛から約三十町の地にある硫質單純の温泉場である。浴室もあれば、旅宿の設備もあつて、其風光賞すべきものがある、臺灣で尤も日本らしい環境の中に將來の

多い温泉地である。この同じ温泉線に沿つて、こゝから猶十三哩南に、も一つ温泉がある。

玉里温泉（玉里支廳玉里庄）花蓮港から五四哩で玉里庄の驛につく、こゝはもと璞石閣といった所であるが、今はたまさか云ふ美名となつてゐるが、其の町から東南一里餘、海岸山脈紅蘆溪の右岸に温泉場がある、地名を恥かしめない幽邃閑雅の樂境で、浴室や旅宿の設備もある、輕便鐵道の便さへあるのである。

以上九ヶ所が今日の臺灣に於ける温泉場と云ふべきものであるがこの外に温泉の出る所は多い、それは領臺草創の際に調査された、臺灣地質鑛産圖說明書に左の如く載せてあるのでしれる。

温泉は火山の露出域にあるものと粘板岩系中に湧出するものと、其數殆ど相同じ、今左に温泉と岩系の關係を示す

宜蘭廳蘇澳	炭酸泉	冷	粘板岩
同 礁溪	單純泉	溫	同
新店川上流ラゲー社	同上	溫	同
東勢角の東鑑瓦社	(?)	溫	同?
濁水溪トロク社	硅質 石灰質	溫	同
同 タウツア	硅質 灰質	溫	同
同 カイラン	單純	溫	同
同 脚社	硫質鐵泉	溫	同

新高山北麓	(?)	熱	同
知本溪	硫質單純	溫	同上
臺東公埔	?	溫	火山岩
恒春半島(二ヶ所)	?	溫	第三系
臺南淡水坪	?	溫	同
嘉義溫水北港溪	?	微溫	同
苗栗出礦社	炭酸鹽質	冷	同
臺北北投	酸性明礬泉	熱	同
同 礦溪內庄	硫質	熱	同
同 七星墩	硫質氣坑	熱	火山岩
同 大礦庄	同	高熱	同
同 大油礦	同	高熱	同

この表は不明瞭の處もあり或は調査不十分だと思はれる點もあるのでこの表によつて揣摩すること
は出来ないが、臺灣の溫泉に凡そ三つの系統があることが知れる。其第一は大屯火山の餘勢に屬す
るもの、第二は臺灣山系の外縁に沿ひ、宜蘭に起り恒春に達するもの、其三は臺東山脈の西に沿へ
る斷層線に沿ふて出るものこれである、中に尤も明に調査されてゐるのか大屯群であるが今石田理

學士又は大島工學士の報告に基きてこの第一群に屬する各溫泉をみると、即大屯火山彙の溫泉は其湧出する處多く、其湧出地の硫氣孔である場合もあり、然らざる場合もあり、其湧出地の火山岩である所あれば或は第三系又は第四系である場合もある、從つて其溫泉の種類は硫黃泉(酸性)鹽類泉及單純泉の三種があり、就中硫黃泉が尤も多く以下順に少い、其硫黃泉の代表的なものが北投で、其湯量豊富であるが、遊離酸を保合し、泉質硫酸性で、餘りに刺激がつよく、皮膚に焮傷を生ずるから、溫度の許す限り、清水を混入する必要がある、その泉源は二つあつて、一つは瀧の湯といひ、一つは星の湯と云はれる、前者は硫黃泉であるが、後者は鹽類泉である、北投停車場から十二町にして浴場があるが、そこから猶北投溪を東北に溯ること五町許にして、長四十六間幅十八間の一小窪地がある、これは一つの舊爆裂火口で、その火口から熱泉と共に硫汽の噴出するのが泉源で一時間三百三十石の量が湧出する、無色透明硫臭を帶び酸味があり、且攀味を帶びて酸性反應であるが、この泉源から北に少くし離れた斷崖をなせる砂岩の中から、星の湯が湧出する、一時間に百六十五石と稱せらるもので溫度は四十二度乃至五十三度であるが其一部を引いて「星の湯」といふ浴場がある、無色透明少しく甘味がある。さてこの兩泉源溫湯が瀧の湯浴場に混入したものが即ち、有名な北投泉浴場である、瀧の湯は九十三度からの熱泉であるが、浴場で四十六度に下り、こゝでは酸性鹽類泉に變つてゐる、この溫泉の流下する熱い水の川に有名な北投石が出来る、此川にはグロ／＼

した石があつて、川の湯が石に接する此水際の所に穢らしい灰色のものが着いて居るがこれは北投石とは關係のないもので、水際より下の所に北投石がつく、重い黄色な菱餅の形の細かな結晶形をなすものと、白い纖維状のものがあつて、共に石膏から成立したものであるが、其生産地は湯源中又は北投溪の上流に限られてゐる。これが何故に有名になつたかといふと、寫眞の種板に載せて置くと一晝夜位で種板に感ずるといふ放射能の存在を、岡本技手が發見したによるもので、それはラヂウムの作用であるといふことになつてゐる。しかしこゝに不思議なことはこゝの溫泉中に殆ど放射能做性を認めなくて瓦斯の中には比較的多いが、それが沈澱物には却て強くなるといふ點である。

北投溫泉の泉源は前に述べたやうに大屯火山の南麓にある爆發口であるがこゝを流れてゐる北投溪の方向東北西南は無意味のものでなく、分水嶺になつてゐる七星山を、東に越ゆると礮溪が西南から東北に流下する。この二つの川の同一方向に流れてゐるのは大屯火山麓を中斷せる大なる斷層線の存在を語るもので、溫泉や、硫氣孔は實にこの線に沿ふて排置されてゐるのである、即東は七星墩大礮嘴等の硫黄坑より西は湖底の硫氣孔に連るものや、金包里の溫泉や草山庄の溫泉や大庄の溫泉いづれも其の成因を一にせりと考へねばならぬ、出口理學士はこの方面を研究し硫黄泉として五ヶ所、鹽類泉として四ヶ所の調査報告をせられてゐるが、今一々其分析表などを擧ぐるの繁をばぶくと共に臺灣の溫泉に關する話をこの邊にて切上げる。(地學雜誌明治四十五年第二十四卷參照)